

## エンカウンター・グループが 看護学生のコミュニケーションの認識に与える影響

岩崎朗子<sup>1)</sup>, 原田慶子<sup>1)</sup>, 吉田聡子<sup>1)</sup>, 大脇百合子<sup>2)</sup>

**【要旨】** エンカウンター・グループは看護学生にとってコミュニケーション能力を見直すだけでなく、自分自身を振り返り、自分や共に学んできた友人との新たな出会いの機会となる。グループ体験は個人の成長に関し効果があるが、「話す」「聴く」という最も基本的なコミュニケーション技術に焦点を当てた研究は見出せなかった。本研究は看護学生のエンカウンター・グループに対する記述を分析してカテゴリーに分け、「話す」「聴く」さらにグループに特有の「沈黙」から学生のコミュニケーションに対する認識の変化を明らかにした。学生は<「話す」ことへの緊張・不安>を体験しながらもグループを重ねることで<「沈黙」への緊張・戸惑い>を軽減させ<「話す」ことへの新たな肯定的印象>と<グループの成長への兆し>を体験していた。この2つのカテゴリーはグループの成長に伴って表れたものであった。

**【キーワード】** エンカウンター・グループ, コミュニケーション, グループ・アプローチ, 看護学生

### はじめに

「話す」「聴く」という行為はコミュニケーション能力として看護教育の中では捉えられており、より良い看護を提供するための基礎的能力とされている。「話す」「聴く」を実際に体験する場としてのエンカウンター・グループは、看護学生にとってコミュニケーション能力を見直すだけでなく、自分自身を振り返り、新たな自分や共に学んできた友人との出会いの機会となる。人の成長に関わるための自己理解(原田, 2005)に有用であり(岩崎, 2003), 石川(1997: p.202)は「グループのなかで学生は教員やグループメンバーに支持され、ときに助けられ、あるいは励まされながらこれまでの自分自身に向き合い、自分の姿に気づき、これからの生き方を模索して行く」と述べている。このようにエンカウンター・グループ体験が個人の成長に関し効果のあることを指摘する研究報告はあるが、「話す」「聴く」という最も基本的なコミュニケーション技術に焦点を当てたものは見出せなかった。

本研究ではエンカウンター・グループを通して、グループ・プロセスを追いながら「話す」「聴く」、さらにこのグループで特徴的に出現する「沈黙」について取り上げ、それらに対する学生(メンバー)の認識の変化を明らかにする。

### 研究目的

看護大学4年及び編入学生に対し実施されたエンカウンター・グループにおいて、参加した学生のコミュニケーションに対する認識の変化を、「話す」「聴く」「沈黙」に焦点を当てて明らかにする。

### 研究方法

#### 1. 対象

A看護大学で、学部の4年次及び編入2年次に「人間関係論・エンカウンターⅡ」の授業を選択履修した学生14名のうち、研究目的、協力内容、倫理的配慮の文

1) 長野県看護大学 2) 長野県看護大学大学院看護学研究科博士前期課程  
2005年10月31日受付

書及び口頭での説明に了解を得られた12名を対象とした。

## 2. 分析方法

- 1) エンカウンター・グループを実施した授業のレポートの内、回ごとに記録された「私の気持ちの動きや行動」「私に影響を与えた人（誰が、どのように）」「感想」から「話す」「聴く」「沈黙」に関連した内容を全て抽出した。
- 2) 内容は回ごとにカテゴリー分けし、カテゴリー間での影響やグループ・プロセスを追っての変化を損なわないよう分析した。
- 3) カテゴリー分けに際しては、時間をあけてカテゴリー分けを繰り返した。また、共にファシリテーターを努めたグループ経験のある研究者の助言を受けることで、妥当性を高めた。

## 3. 授業の構成と授業内容

授業は二部構成で、前半90分はエンカウンター・グループを実施し、後半90分は参加した前半グループの記録用紙記入と振り返り、小講義を行った。授業は毎週1回計8回行った。

- 1) 授業としてのエンカウンター・グループについて  
メンバーとファシリテーターが円形に並べた椅子に座り、事前にテーマを決めず、自由に話し合った。自分について語り、人の話を聴くことや他者とのコミュニケーションを通し、自己理解、他者理解、人間理解を深めることと、グループ・アプローチについて学ぶことを目的に実施した。
- 2) 後半の授業内容について  
前半のグループの体験に関する記録を行い、振り返りを行った。小講義では、グループを看護実践の場面で活用するために必要な、理解と実施を支援する内容を

を講義した。このレクチャーは同時に、エンカウンター・グループでの体験を学びに繋げ深める目的もあった。内容としてはグループ内での言語的・非言語的コミュニケーション過程、ファシリテーターの役割、ウォーミングアップ等についてである。

- 3) ファシリテーターとしての教員の役割について  
グループの経験のある教員2名がファシリテーターを務め、参加学生（以下メンバーとする）は自由に話題を提供しあい話し合いを進めた。メンバーに対して、グループ内での発言は互いに守秘義務を守るよう説明した。ファシリテーターはメンバーの安全と自由を確保するように対応した。ファシリテーターの行動基準として相手中心であること、個の尊重、非評価の姿勢、非操作、ともにあること（星野、2003）を重視した。

## 4. 倫理的配慮

- 1) 2005年1月に長野県看護大学倫理委員会の審査を経た（審査番号35）。
- 2) 書面と口頭で研究目的、協力内容、プライバシーの保持について説明を行い同意書に署名を求めた。また協力を求める時期として全ての成績評価を終了した時点に行い、研究への協力や分析内容が学生の評価に影響しないよう配慮した。

## 結 果

### 1. 「話す」「聴く」「沈黙」に関する記述の全体像

全8回のエンカウンター・グループを通し、267件の記述が抽出された。「話す」ことに関連した内容は151件（56.6%）、「聴く」に関するもの54件（20.2%）、「沈黙」に関するもの49件（18.4%）であった。「話す」「聴く」の両方を含む会話に関する記述は13件（4.9%）であった（表1）。

表1 エンカウンター・グループの実施回ごとの、「話す」「聴く」「沈黙」に関しメンバーの振り返り用紙から抽出された記述件数

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目	合計
話 す	19 (47.5)	27 (58.7)	17 (54.8)	16 (59.3)	23 (60.5)	13 (44.8)	22 (71.0)	14 (56.0)	151 (56.6)
聴 く	3 (7.5)	9 (19.6)	11 (35.5)	11 (40.7)	7 (18.4)	6 (20.7)	4 (12.9)	3 (12.0)	54 (20.2)
沈 黙	18 (45.0)	9 (19.6)	3 (9.7)	0	8 (21.1)	7 (24.1)	2 (6.5)	2 (8.0)	49 (18.4)
その他	0	1 (2.1)	0	0	0	3 (10.3)	3 (9.7)	6 (24.0)	13 (4.9)
合 計	40	46	31	27	38	29	31	25	267

表2 メンバーの記述から分類された「話す」「聴く」「沈黙」に関連したカテゴリーと記述内容

カテゴリー	記述内容
<u>「話す」に関連したカテゴリー</u>	
「話す」ことへの肯定的印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えたいことを話す瞬間のある自分に気づいた</li> <li>・一度発言したら、わりと発言しやすかった</li> <li>・会話を楽しんだ</li> </ul>
「話す」ことへの新たな肯定的印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前ほど他人の様子をうかがったり、自分の中でいろいろ考えたりすることもなく、自然に会話を楽しみ、身を置いておくことができるようになってきていると感じた</li> <li>・まだ自分が話し始める時に『言うか、言うまいか』勇気はあるが、みんなに受け入れてもらえることが分かっているの、それが自分の中で勇気になっていると思う</li> </ul>
「話す」ことへの緊張・不安	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自由に話せる時間でも自分からは話せない</li> <li>・(自己紹介するのにも) ドキドキした</li> <li>・話せなくても、話し過ぎても否定的な感情が生まれてくるように感じた</li> </ul>
他者からの働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・誰かが働きかけることで反応する相手がいる、1つのきっかけで相手の思いの表出に繋がる</li> <li>・自分を分かってもらうためには表現し、言葉で表していくことは必要だが、全てそれで良いのかも少し考えてみよう</li> </ul>
「話す」ことが自分に与える影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話しの展開に関心が持てないと思っていたが、実際は言いたいことが言えないから関心が持てず自分を出せなかったのかもしれないと思った</li> <li>・グループのなかで自分のことを知ってもらうためには、やはり自分を表現していかないと本当の自分は分からないと思う</li> </ul>
「話す」役割と姿勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(親友との会話で) 話を聞くのが自分の役割だと思っていたが、他人に話すことも自分にとっては大切なことだと思った</li> <li>・何も発言しなかった時は自分の心の動きだけだったが、発言してみるとメンバーの反応も見られ、相手の新しい面や自分には無い考え方も近い部分で聞けた</li> </ul>
会話の進行に対する働きかけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話題を出した人が話をまとめなくてはならないという、責任のようなものを感じることもある</li> <li>・一部だけで盛り上がってしまうと、これでいいのかなと気を使ってしまう</li> </ul>
<u>「聴く」ことに関連したカテゴリー</u>	
「聴く」ことへの肯定的印象	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の話を聞いているのが凄く楽しかった</li> <li>・Aさんが口を開いたことがとても嬉しい気持ちにさせた</li> <li>・いろいろな話をしていたな、人の話を聞くのは面白い</li> </ul>
「聴く」態度・非言語的コミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分かるという気持ちを込めて頷いていた</li> <li>・今までは下ばかり向いていたが、今日は話している人の顔を見て話を聞いた</li> <li>・受動的に頷いたりヘラヘラ笑っている自分をどうにかしたいなと思う</li> </ul>
「聴く」ことで起こる他者への興味	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周りの皆に興味をもって話を聞き、知らなかった一面を知ることができた</li> <li>・1回も話さない人は、あの場で何を考えていたのか知りたい</li> </ul>
「聴く」ことで起こる自己理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・周囲の会話によって、発言前は勿論発言後も『自分はのだろうか?』と考えている自分がいた</li> <li>・いろいろな人の話を聞き、自分と照らし合わせて考えてみた</li> </ul>
<u>「沈黙」に関連したカテゴリー</u>	
「沈黙」への緊張・戸惑い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沈黙に戸惑った</li> <li>・沈黙が続いた時、早く誰かが話さなければと思った</li> <li>・自己紹介の時に沈黙があって、さらに緊張した</li> </ul>
「沈黙」時のメンバー観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんな意外と沈黙って駄目なんだと感じた</li> <li>・沈黙が続いた時には、皆様々な反応をしていた。不安そうな人、周りの様子をうかがっている人、下を向いている人も居た</li> </ul>
「沈黙」時の自己のあり方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沈黙の時間があっても勿論良いと思っていたので、自分が話したいと思うまで待っていた</li> <li>・実習のカンファレンスで何時も私が最初に意見を言っていたこと、沈黙が恐くてそうしていたのかもしれない。(中略)「沈黙」によって、私は『言わなくては』と今もどこかで感じているように思う</li> </ul>
「沈黙」を動かす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・始めに沈黙が続いた時落ちついた気持ちだったが、途中からは話題はないかと一所懸命考えるようになっていた</li> <li>・皆は何を考えているのだろうかと関心を持ちだし、時間がもったいないと思った</li> </ul>
「沈黙」時の安定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今日は沈黙が長かったが、リラックスして特に何も考えていなかった。ゆっくりしていた</li> <li>・沈黙の間はボーっとしていたが、話が始まると話し手を見て頷いたり笑ったりしていた</li> </ul>
<u>その他のカテゴリー(会話に関連したカテゴリー)</u>	
グループ成長への兆し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の話を聞いてそれに対応して自分の考えを話して…、というように自分のペースで参加でき気分的に楽だった</li> <li>・積極的に参加したが、途中から他の人の流れにグループの流れを任せようと、黙ったり頷いたりしていた</li> </ul>

## 2. 「話す」に関して学生が記述した内容

8回を通してエンカウンター・グループに対するメンバーの記述を分析したところ以下<>で示したカテゴリーが得られた(表2)。

1回目のグループにおいて17件の「話す」に関連した記述のうち、肯定的な捉え方は<「話す」ことへの肯定的印象>1件のみであった。他の記述は<「話す」ことへの緊張・不安>であり、「自分が話さなければ」「緊張した」「自由に話せる時間でも自分からは話さない」など、発言することへの緊張や戸惑い、私が話して良いのかといった内容であった。

2回目のグループで、27件の記述は大きく3つのカテゴリーに分類された。<「話す」ことへの肯定的印象>と<他者からの働きかけ>、そして<「話す」ことへの緊張・不安>である。<「話す」ことへの肯定的印象>の主なものは、「一度発言したらわりと発言しやすかった」「積極的に発言した」「会話を楽しんだ」などであった。<他者からの働きかけ>には「誰かが働きかけることで反応する相手がいって、1つのきっかけで相手の思いの表出に繋がる」「自分を分かち合おうためには表現し、言葉で表していくことは必要だが、全てそれで良いのかももう少し考えてみよう」とコミュニケーションにおける相互関係の基礎的な部分への記述が見られた。

3回目のグループでは、「話す」ことに対する肯定否定の評価ではなく、<「話す」ことが自分に与える影響>を述べていた。「グループのなかで自分のことを知ってもらうためには、やはり自分を表現していかないと本当の自分は分からないと思う」「自分の傾向として、何か言う時に躊躇するところがあり、踏みこむのに凄いエネルギーを使っていると思った」などである。

4-6回目のグループ内で、普段の会話とを比較し、自分自身が取っていた役割や「話す」ことへの姿勢<「話す」役割と姿勢>が記述されていた。「他人に話すことも自分にとっては大切なことだと思った」「人に話を振られてから話したので、私は自分から話さないと実感した」。また、<会話の進行に対する働きかけ>について、「自分から意見を変えると、発言してきっかけを作るのは難しい」「話しの途中で切り返す

ような、話しの展開に大きく関わる発言を(自分は)しない」などの記述がされた。3回目のグループで見られなくなっていた<「話す」ことへの肯定的印象><「話す」ことへの不安・緊張>が再度記述された。会話に集中してグループを楽しむ一方、メンバーがどう受け取るか、他者の発言の自由を認めつつも自分自身は自由にられない状況が記述の中に表れていた。「話せなくても、話し過ぎても否定的な感情が生まれてくるように感じた」「相手を傷つけてしまう部分に触れるのではないか」といった記述に示されていた。

7-8回目のグループでは、<「話す」ことへの肯定的印象>はそれまでの「楽しい」「思わず話してしまった」という単純な印象から、グループ・ダイナミクスを反映したものに变化した。「まだ自分が話し始める時に『言うか、言うまいか』勇氣はいるが、みんなに受け入れてもらえることが分かっているので、それが自分の中で勇氣になっていると思う」「話しても良いのかなと躊躇することもあるが、話を切り出すエネルギーは少なくなった」。<「話す」ことへの緊張・不安>を伴ってはいるが、メンバーと回を重ねることので得られた新たな関係により、グループの初期の段階とは異なった視点での肯定的印象が得られていた。<「話す」ことへの新たな肯定的印象>として、別のカテゴリーとした。

## 3. 「聴く」に関して学生が記述した内容

「聴く」ことに関する記述は全8回のグループを通して54件あった。各回の記述内容が「話す」内容に比べて短く、プロセスを通しての変化は明らかにされなかった。記述の中に表れたカテゴリーとしては、以下の4つがあった。<「聴く」ことへの肯定的印象>、<「聴く」態度・非言語的コミュニケーション>、<「聴く」ことで起こる他者への興味>、<「聴く」ことで起こる自己理解>である。

<「聴く」ことの肯定的印象>には「人の話を聞いているのが凄く楽しかった」「Aさんが口を開いたことがとても嬉しい気持ちにさせた」などであった。全回を通して、肯定的印象には「話す」記述に生じたような新たな変化はなく、グループ終盤でも「いろいろな話しをしていたな。人の話しを聞くのは面白い」と

いう記述に留まった。

＜「聴く」態度・非言語的コミュニケーション＞は、自分の「聴く」態度への気付きであり、ファシリテーターを含め自分以外のメンバーの聴く態度への記述である。「分かると言う気持ちを込めて頷いていた」「今までは下ばかり向いていたが、今日は話している人の顔を見て話を聞いた」「賛同している人がいると嬉しく、ちょっとでも同じことはフィードバックしていきたい」であった。

＜「聴く」ことで起こる他者への興味＞では「周りの皆に興味をもって話を聞き、知らなかった一面を知ることができた」という新たな出会いに対する記述もあったが、多くはグループの場面で語らない、あるいは会話に加わらないメンバーに対するものであった。「1回も話さない人は、あの場で何を考えていたのか知りたい」「話しに参加しない人は何を考えているのか」等の記述である。

＜「聴く」ことで起こる自己理解＞は、内面への気付きではなかったが、「聴く」ことに刺激されて自分のことを振り返る時間としてグループを使っていた様子が示されていた。「周囲の会話によって、発言前は勿論発言後も『自分はどうか？』と考えている自分がいた」「いろいろな人の話を聞き、自分と照らし合わせて考えてみた」であった。

#### 4. 「沈黙」に関して学生が記述した内容

「沈黙」に関する記述は1回目が最も多く、またメンバー12名の内10名が何らかの記述をしていた。全体を通し、徐々に記述数の減少が見られ、4回目のグループでの記述は0件であった。

1回目のグループで、メンバーは「沈黙」に対しては3つの異なる記述をしていた。＜「沈黙」への緊張・戸惑い＞と分類できる内容では、「沈黙に戸惑った」「沈黙が続いた時、早く誰かが話さなければと思った」などであり、沈黙している間のメンバーの様子を見ている＜「沈黙」時のメンバー観察＞では、「沈黙が続いた時には、皆様々な反応をしていた」「沈黙の時皆何を考えているのだろうと周りを見ていた」と記述されていた。観察は周囲を客観的に認識している視点ではあるが、自分もグループの一員であるとの立場からで

はなく、自分自身をグループから切り離している視点であった。＜「沈黙」時の自己のあり方＞では「実習のカンファレンスで何時も私が最初に意見を言っていたこと。」「“沈黙”によって、私は『言わなくては』と今もどこかで感じているように思う」と記述し、緊張・戸惑いとは違う自分自身の沈黙の時への気付きと振り返りが記録されていた。

2回目のグループでは1回目同様、＜「沈黙」への緊張・戸惑い＞と＜「沈黙」時のメンバー観察＞が認められたが、＜「沈黙」時の自己のあり方＞はなかった。

3回目のグループでは1, 2回目同様＜「沈黙」への緊張・戸惑い＞が記録されていた。また、新たにグループのプロセスに影響を与える＜「沈黙」を動かす＞記述が登場した。「始めに沈黙が続いた時落ちついた気持ちだったが、途中からは話題はないかと一所懸命考えるようになっていた」である。緊張はあるものの自分自身が発言しようとしており、他者によって「沈黙」による緊張状態を緩和しようとするものではない特徴があった。自分自身が発言することがグループの進行に影響すること、話題の提供者の重要性について触れられた最初の記述である。また、4回目では「沈黙」に関する記述は見出せなかった。

5回目のグループで、＜「沈黙」への緊張・戸惑い＞が無くなり＜「沈黙」時の安定＞へと変化していた。「沈黙」を個人的時空間として浸っている状態が示された。「リラックスして特に何も考えていなかった。ゆっくりしていた」「沈黙の間はボーっとしていたが、話が始まると話し手を見て頷いたり笑ったりしていた」等である。メンバーの参加状況としては、「沈黙」に緊張する者、「沈黙」に安定してしまう者、「沈黙」を動かし話し合いをしようとする者が共存していた。

6回目のグループでは、グループ開始当初沈黙が30分近くも続いたため、＜「沈黙」の安定＞にあったメンバーも動かす必要性を意識していた。＜「沈黙」を動かす＞記述は、「皆は何をを考えているのだろうか」と関心を持ちだし、時間があったいなと思った」「今日は始め凄く長い沈黙があり、どうなるのだろうと思って少しじれったかった」など、苛立ちを含む内容であった。

7-8回目のグループ終盤では「沈黙」に関して<

「沈黙」への緊張・戸惑い><「沈黙」を動かす>の2つの側面に関する記述がなされた。グループに生じる「沈黙」に対する緊張と戸惑いは、<「沈黙」を動かす>視点があって解消され、これによりグループは進行した。

## 5. 会話のやりとりからみたグループ・プロセス

「話す」「聴く」の両面を含む「話し合う」意味での記述は、2回目のグループで「話したい時に話して、聞きたい時には聞いて、ずっと楽にいられた」とグループ内の自身のあり方を含む内容として見られた。これ以降6回目のグループまでは見られなかった。6回目では「楽しい時間が過ごせるように話ができたらいいなと、グループに参加するようになった」「皆が平等に話して欲しいと思う私の考えがあるのかなと思う」と、グループ全体を捉えてのコメントが出現した。7回目では「全員で大笑いする場面も何回かあって、このグループにとっては大きな変化ではないかと思う」と、グループの変化に注目していた。最終回の8回目では以下の記述があった。「話しをする人が一定ではなく、皆で話している雰囲気が暖かかった」「積極的に参加したが、途中から他の人の流れにグループの流れを任せようと、黙ったり頷いたりしていた」であった。これらの内容は<グループ成長への兆し>とした。

## 考 察

### 1. グループ・プロセスと「話す」「聴く」「沈黙」

メンバーはエンカウンター・グループ実施当初、<「話す」ことへの緊張・不安>を持ち、<「話す」ことへの肯定的印象>を意識しながらも自由に発言することができなかった。「話す」という行動が自由に行われなければ自ずと「沈黙」が生じる。<「沈黙」への緊張・戸惑い>は「沈黙」には肯定的な意味のあることを知識として知っていても回避することは難しく、また感覚として居辛さを体験することを示していた。一部のメンバーは「沈黙」そのものを解消する方法ではなく、<「沈黙」時のメンバー観察>を行うことでグループ内の居場所を作っていた。他のメンバーの様子を客観的に見ているが、その視点は積極的関心や共感につながる他者理解ではなかった。これに対し、<「沈黙」時の自己のあり方>は<「沈黙」を動かす>行

動へと繋がるものであった。緊張や不安といった事柄はエンカウンター・グループの発達段階では「当惑・模索」と分類されている(村山, 野島, 1977)。メンバー内に起こる<「沈黙」時のメンバー観察>はグループに参加しているメンバーとしての自己の存在と切り離しているために、グループがより肯定的感情を持ち親密さを表明できるグループにしていく力にはなりにくい。これに対して<「沈黙」時の自己のあり方>はグループの親密度や相互理解に影響する要素を含むと考えられた。

「沈黙」を解消しグループを動かすには、<「話す」ことへの緊張・不安>があってなお話そうとすることが求められる。この力を後押しするのは<「聴く」ことへの肯定的印象>であり<「聴く」態度・非言語的コミュニケーション>である。長田, 松尾ら(2001)は『自己表現して受け止めてもらえる喜び』として「自分について勇気をもって他者に話して受け入れられた時の安心感や他者に理解されることの喜びの実感」と述べ、メンバーにとって貴重な体験であることを報告している。メンバーあるいはファシリテーターから受けた肯定的な態度は、次に自身が聞き手となった時に他のメンバーに対し発信する非言語的なコミュニケーションの具体的態度となって現れ、相互作用が生まれ、会話を続ける行動が連鎖していく。特に沈黙への緊張が高い場合はこの関係性やメンバーが相互作用をどう受け取るかがグループの進行を一時的に左右する。野島(2002)はグループの導入段階での経過がグループの展開に影響し、最終的に高展開グループつまり参加メンバーが満足し穏やかに終了するグループになるか、不満足感をメンバーが持ったまま終了する低展開グループとなるかを左右し、それがグループの成長に関わる要素であるとしている。

一方グループ・プロセスの中で<「沈黙」への緊張・戸惑い>の減少が、回を重ねることで生じるグループへの親密感、安全、安心感によって逆にグループの発展を阻害することがある。野島(2000)はグループ・プロセスの初期に起こる否定的感情の表明が起こることと沈黙の扱いを指摘しているが、本グループの場合<「沈黙」時の安定>としてメンバーに体験されていた。沈黙していてもこの場に居心地良くいられる体験

をし、発言する行動がそのまま積極的な参加を示すことではないと認識される。発言しない人もグループに参加しているのだとメンバーが認め、さらに、「沈黙」を自己の振り返りの時間として体験することが影響していた。他者の発言に刺激され、自己の過去の経験が思い起こされ、それを振り返り思考するために、実際のグループ内での会話のやり取りに参加できなくなるのである。これと相反する状況の生じる背景として武井（2002：p.97）は以下の指摘をしている。「次第に落ちついてくると、焦って話さないでもいられるようになり、『ここにこうしているだけでよい』という雰囲気が生じてくるようになる。ほとんどことばを必要としない『甘え』の世界といってもよい」。しかし本研究でのメンバーは、「甘え」の世界ではなく、安心感の共有であったといえる。この安定が継続した場合もグループが成立せず膠着状態に陥る。しかし、ここで体験される安定はグループに対する安心や他のメンバーに受け入れられている体験であって、ここをどう過ごすか、ファシリテートするかがグループの成長に影響するのである。メンバーがグループを共有していくためには、時間と場所を共存することで安心感を生み出すが、エンカウターの元々の意味である出会いを体験しグループを進めるためには他者への興味や積極的関心が求められ、メンバーが自己の世界に浸る沈黙への体験をもちつつそれを動かそうとする力が必要となるのである。

## 2. 「話す」「聴く」「沈黙」がグループの成長に与える意味

グループ・プロセスの終盤においてみられた<「話す」ことの新たな肯定的印象>と<グループ成長への兆し>はグループがその発達段階として高展開グループとなり得る必要な条件である可能性があった。平山（2002）はエンカウンター・グループ個人過程測定尺度の因子の1つとして「自然な自己表現」を挙げている。本研究のグループでは、自己表現として大きく「話す」ことを、自己表現を困難にする要因として「沈黙」を捉えていた。「話す」ことに伴って生じる緊張を緩和し、発言する自己を主張するための原動力は自身の発信欲求のみではなく、それを受容するメンバー

の存在があり、お互いに受容し受容された経験を通してこのグループ内での自由な発言となっている。<「話す」ことの新たな肯定的印象>はこの体験を通して得られたものであった。エンカウンター・グループなどの体験学習について津村、山口ら（1992）は「“変化すること”は“成長すること”である」とし、「体験学習は個人の成長に大きく寄与するものである」と述べ、体験的に得た肯定的印象はグループ全体への評価や満足に影響を与えるものといえる。

## 結 論

看護学部生及び編入学生12名を対象に、全8回のエンカウンター・グループを選択科目の授業として実施した。各回の記録のうち「私の気持ちの動きや行動」「私に影響を与えた人」「感想」から「話す」「聴く」「沈黙」に関連した内容を全て抽出しカテゴリーに分析したところ、コミュニケーションに対する認識の変化が以下のように明らかになった。

当初メンバーである学生は<「話す」ことへの緊張・不安><「沈黙」への緊張・戸惑い>を持っていた。そのためグループ内で自由な自己表現を行ったり安心してその場に参加することが困難であった。エンカウンター・グループへの参加を重ねることで、緊張・不安は無くなるながらも、他者からの働きかけや自発的なコミュニケーションを取ることで自己に生じる影響、「聴く」ことによる他者への興味、「沈黙」の時間を安心して過ごす体験をしていた。この体験は自己や他者との関係性を振り返ることを可能とし、<「沈黙」への緊張・戸惑い>を軽減させ<「話す」ことへの新たな肯定的印象>と<グループの成長への兆し>へと繋がっていた。この2つのカテゴリーはグループの成長に伴って表れたものであった。

## 本研究の限界

本研究では、エンカウンター・グループで話し合われたテーマについて、一切触れていない。これはエンカウンター・グループそのものが守秘義務を重要視している点と、授業という枠組みの中で行われたため研

究を前提としておらず、グループ・プロセスを明らかにできない点による。そのため、今回用いたメンバーの記述がコミュニケーションの認識の変化と、グループ・プロセスとの関係を明確にすることに限界があった。また、対象人数に実施上の制限があり、対象数による研究の妥当性を高め一般化をすることは困難である。

今後グループ・プロセスの評価を客観的に行い、教育プログラムとしてのエンカウンター・グループを重ねて実施し、コミュニケーションの認識の変化に与える影響や自己理解・他者理解に与える影響をより明確にすることで、看護教育プログラムとしての活用を広げる必要があると考える。

## 文 献

- 星野欣生 (1992): 体験から学ぶということ. 津村俊充, 山口真人編, 人間関係トレーニング 一私を育てる教育への人間学的アプローチ. 5-10, ナカニシヤ出版, 東京.
- 星野欣生 (2003): ファシリテーターは援助促進者である. 津村俊充, 石田裕久編, ファシリテーター・トレーニング 自己実現を促す教育ファシリテーションへのアプローチ. 7-11, ナカニシヤ出版, 東京.
- 平山栄治 (2002): エンカウンター・グループと個人の心理的成長過程. 風間書房, 東京.
- 原田慶子 (2005): 学生が自分を理解して行くプロセス. 日本看護学教育学会誌, 1-8.
- 石川みちこ (1997): 看護場面を再構成を用いたグループ・エンカウンター. 飯田澄美子, 見藤隆子編著, ケアの質を高める看護カウンセリング. 199-209, 医歯薬出版, 東京.
- 岩崎朗子, 池田紀子 (2003): 授業中のエンカウンター・グループの効果. 日本看護学教育学会第13回学術集会抄録集.
- 見藤隆子 (1996): からだを聴く 看護の限りない可能性を拓くもの. 日本看護協会出版会, 東京.
- 野島一彦 (2000): エンカウンター・グループのファシリテーション, ナカニシヤ出版, 東京.
- 長田京子, 松尾典子他 (2001): 看護学生の対人関係能力の育成をめざした授業の教育効果. 島根医科大学紀要, 21-26.
- 武井麻子 (2002): グループという方法. 医学書院, 東京.



【Summary】

## The Effect of Encounter Group on Communication Ability and Knowledge of Nursing Students

Akiko IWASAKI<sup>1)</sup>, Keiko HARADA<sup>1)</sup>, Satoko YOSHIDA<sup>1)</sup>, Yuriko OWAKI<sup>2)</sup>

1) Nagano College of Nursing

2) Graduate Student of Nagano College of Nursing

Encounter groups offer opportunities for nursing students to reflect with themselves and meet new selves and friends learning together, not only to review their communication ability. There are some study reports that point out that group experience is effective in individual growth, however, there is none to focus on fundamental communication skills such as “speaking” and “listening.” This study analyzes and categorizes descriptions of the students’ groups and reveals how “speaking,” “listening” and “silence” which is peculiar to the group affect their communication. The students overcame “stresses and embarrassment from silence” and experienced “new positive impression on speaking” and “a sign of growth of the group” by going through group sessions while they experienced “stresses and strains of speaking.” These two categories emerged along with the groups’ growth.

**Keywords:** encounter group, communication, group approach, nursing student

---

岩崎朗子（いわさき あきこ）  
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学  
Tel. & Fax: 0265-81-5195  
Akiko IWASAKI  
Nagano College of Nursing  
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan  
e-mail: akiko@nagano-nurs.ac.jp